

◆研究概要等

ボランティア、とくに学生らによって担われるワークキャンプ(労働奉仕型ボランティア)を研究してきました。そのなかでもとくに、ハンセン病問題に取り組む活動の意義や可能性を研究しています。

2012年5月から、京都大学グローバルCOEの助成を受けた学生ボランティアの研究会に参画し、その成果を共著『承認欲望の社会変革——ワークキャンプに見る若者の連帯技法』(京都大学学術出版会)としてまとめました。

ハンセン病問題、ボランティアなど具体的な事象を取り上げ、理論社会学、社会哲学的な抽象度の高い概念を参照し、その分析研究をテーマとしています。

■研究テーマ等

1. ハンセン病問題に関する研究

過酷な差別にさらされたハンセン病。現在は治療法が確立されて久しく、世界的にも制圧傾向にあります。しかしながらこの「病い」に対する差別はいまだ根強く、社会の中に残っています。このハンセン病という「病い」は、いったい何だったのか。ハンセン病が終焉しようとしている現在、それがもつ意味を、「表象」の観点から社会学的に研究しています。



社会マスメディア系専攻
国際社会学研究室
准教授
にしおたけし
西尾雄志

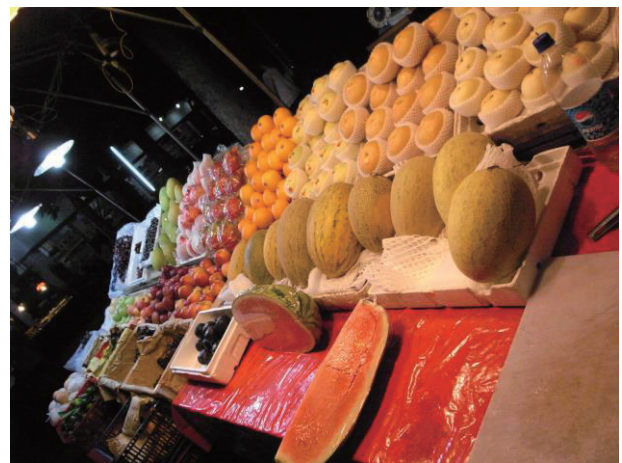
nishiotks@socio.kindai.ac.jp



<http://researchmap.jp/read0205987/>

2. 「贈与」に関する研究

現代の日本社会では、お金を出してモノやサービスを買う「交換」が支配的な世の中です。しかし社会は、「交換」関係のみによって営まれてきたわけではありません。「交換」と同様に、「無償」の「贈与」も大きな役割を果たしてきました。そしてその贈与は現代社会の中にも、生きています。この贈与のもつ意味を文化人類学の知見も借りながら研究しています。



3. ワークキャンプ(労働奉仕ボランティア)に関する研究

ワークキャンプとは第一次世界大戦後に、絶対平和主義者であるキリスト教のクェーカーによって開始された活動で、関東大震災時に初めて日本にもたらされ、第二次大戦後に日本でも土着化していきました。ボランティア活動の一形態としてとらえられがちな活動ですが、その長い歴史に比して、研究がほとんど進んでいません。このワークキャンプのもつ可能性と陥穽を研究しています。

4. 社会哲学研究・理論社会学研究

様々な社会現象の背後には、「意味」があります。その意味を理解するためには、理論がどうしても必要になってきます。マックス・ヴェーバーの近代化理論、ハンナ・アーレントの政治哲学から、アクセル・ホネットの承認論、ナンシー・フレイザーのフェミニズム理論、アルベルト・メルツチ、アラン・トゥレーヌの新しい社会運動論など、具体的事象を扱った研究とともに、その分析枠組みを得るために、理論的な研究も重点的に行っています。

●論文・作品・表彰・委員等

■表彰

2006年9月「散るもよし 今を盛りの 櫻かな—らい予防法廃止10年、国賠訴訟5年。ハンセン病のいま」にて第17回週刊金曜日ルポタージュ大賞「優秀賞」受賞。

■著書

共著『ボランティア論——共生の理念と実践』（ミネルヴァ書房）2009年。

共著『世界をちょっとでもよくしたい——早大生のボランティア物語』（早稲田大学出版部）2010年。

単著『ハンセン病の「脱」神話化——自己実現型ボランティアの可能性と陥穽』（皓星社）2014年。

共著『承認欲望の社会変革——ワークキャンプに見る若者の連帯技法』（京都大学学術出版会）2015年。

■委員

文部科学省生涯学習政策局青少年教育課「青少年教育課の体験活動関連事業に係る技術審査委員会」
技術審査委員

■他

2015年1月15日 博士(学術) 授与大学：早稲田大学

▲趣味等

20代、30代のころは、アジアを中心に年の何割かは海外で過ごしていました。が、近年は完全なインドア派であり、休日はひたすら本を読んでいます。

◆ゼミの宣伝等

ゼミでは、現場体験を重視します。ワークキャンプでもスタディツアーでも構いません。現場に立ち、汗を流し、そこで感じた疑問をもとに、勉強する学生を期待します。

◆推薦図書

丸山正樹『デフ・ヴォイス』文春文庫。

横尾俊成『「社会を変える」のはじめかた—僕らがほしい未来を手にする6つの方法』産学社。

水谷竹秀『日本を捨てた男たち—フィリピンに生きる「困窮法人」』集英社文庫。

水谷竹秀『脱出老人—フィリピン移住に最後の人生を賭ける日本人たち』小学館。